

日本基督教においては、
でもが行なえた觀法（即
教職觀法）が検索され、
その結果「同字觀」が完
成された。

(七七八一八三五)「」
で実験(七八六一八四七)記述される『同字翻用心口述』は、さういふとし
て種々なる論議、そして解説書なりむと云ふが多
くある。

現行阿字觀に大きな影響

種智院大學密教
資料研究所長



吉田お・りゆうしん（昭和三十二年～一九五七）京都生まれ。五十六年、種智院大学卒業。六十二年、大正大学大学院博士課程哲言学専攻修了。種智院大学専任講師を経て平成十六年に同大学教授となり、現在に至る。平成二年、智山勲学奨励賞、七年、第一回日本

現在、種智院大学教授、種智院大学教務部長、日本密教学会理事、佛教文化学会評議員、智山専修学院講師、川崎大師教学研究所専門研究員、小僧会相談役など。著書に「密教瞑想の研究」(東方出版)など多数。

阿字觀説く伝書の一つ
だが知られざる全貌

「安祥寺流」の 伝書と位置づけ

黒川の会議(答申)と
刻)を掲載した。

われてゐる回字體に影響を与えて、これは書の一つが『回字墨絵』である。この「回字墨絵」は、別名「回字御繁縝」「御觀風墨絵」ともいって、「道教大辭典」においても「回字墨絵」として一項目をもつて採り上げられてゐる。筆の名なものであり、今日まで伝承流れさせてゐるのである。これに『道教大辭典』の「真字墨絵」の項目を挙げると

「SIS」の中で最も現在行なわれている国字観に影響を与えたといふのが、一つ

四庫全書

とおり、それゆえに『阿字黒細』の紹介は「口まで水原発榮氏や大野鉢覽氏等によってなされてきたが、その全貌は明確に示されてこなかった。

それ以後にこの「阿字
黒相」については前水の
『密教大辞典』では「安
祥寺流に相傳する阿字觀
の祕訣を收む」とあり、
安祥寺流の伝書という位

であり、今日まで伝承流れ
伝承されているのである。

至る祕訣を記し、毎紙面
を飾る。初葉は弘法大師
御傳真言實相の阿字
觀作法を記し、第二葉は
本有阿字を觀する法、第
三葉は本有の阿字即ち金
剛薩埵なりと觀する法、
第四葉は修生の阿字注釋

画で解説されているが、実際、その全貌を見られただ。大野氏は「密教大辞典」によれば、阿字黒箱は安流の相伝であるといつてあるが、高大（高野山大勢）圓鏡院藏の黒箱はそのことを記している。しかしも、大野氏は『阿字黒箱』の成立年代の決定等ではやはり安祥寺流の伝書として解説されている。

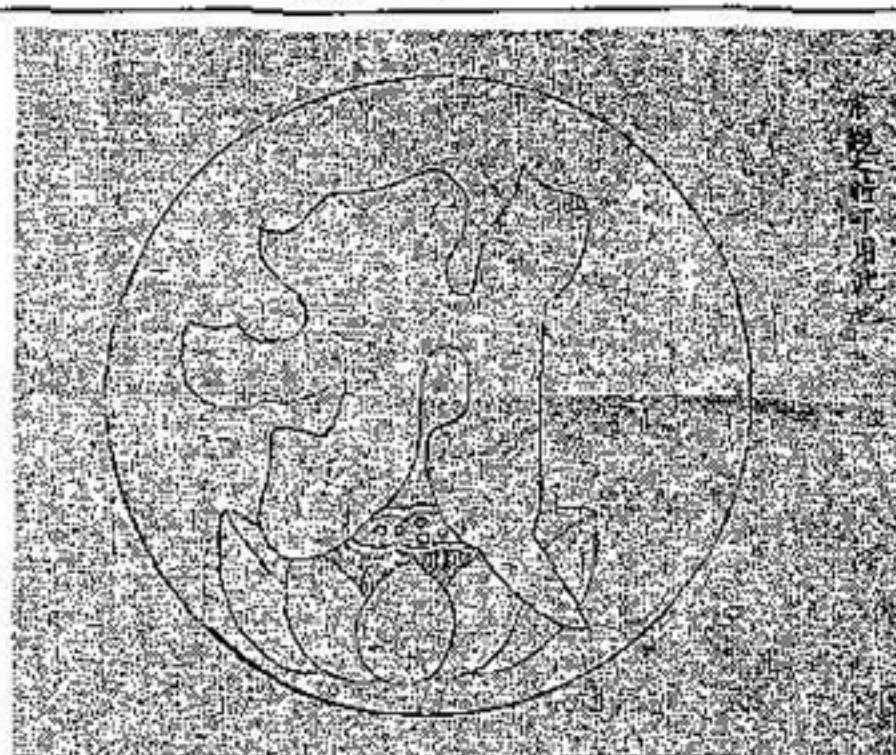
同種埋立地に於ける
第四度の回生状況

日本密教の系譜『阿字裏箱』

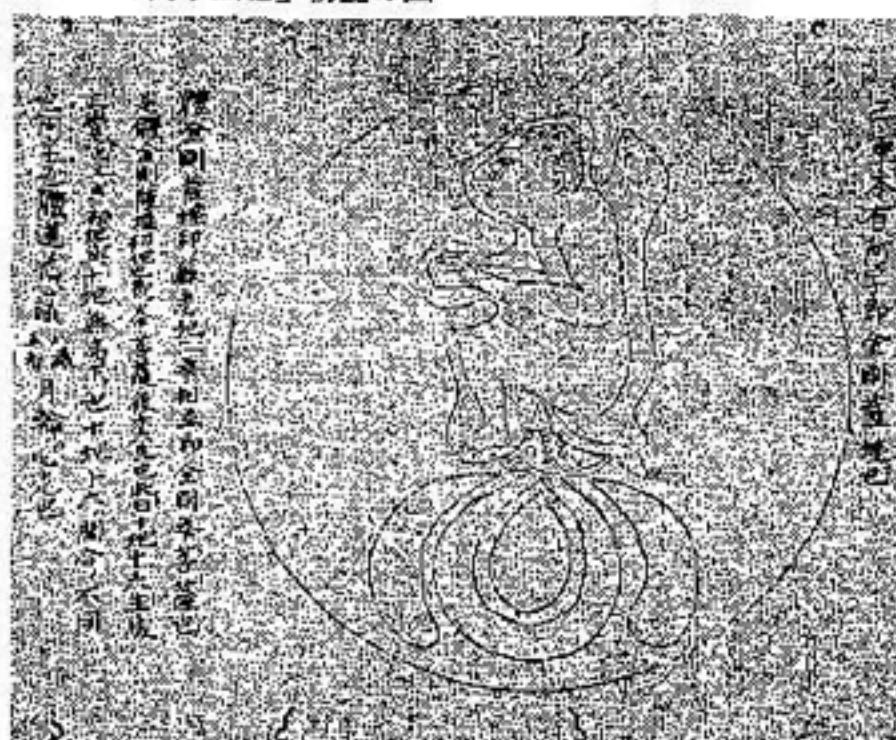
『安流黒箱』混淆の可能性も

稿「長谷文庫藏『貴婦最極秘書(國字黑體)』に
ついて(一)」(『通智院大學密教資料研究所紀
要』第八号所収)によれば、「國字
ト書くべき事項」に「國字

「俗雜記問答抄」に「『眞俗雜記』は、大英圖書館所藏の『眞俗雜記』の寫真版を記述する論文である。



弘法大師以来相承されてきた阿字觀作法を記した
「阿字墨籠」初重の圖



阿字即ち金剛薩埵であると觀する法を
あらわす「阿字墨箱」三重の圖

身で五十年近く教鞭を執られた眞理堂教学の本巨著である長谷賀秀郎師（一八六九—一九四八）の著作と、長谷師が体系的に収集された貴重な資料等が收められている。本研究所では長年、調査整理を手掛けており、「研究所紀要」第八号から順次その成績報告を行なっている。